

カルチャーショックを招いた日本のジェンダー役割分担と私の留学の経験

お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科ジェンダー学際研究専攻
バラニャク平田 ズザンナ マリア

私が初めて来日してからいつの間にか10年も経った。2010年に子どもの頃から遠い夢のように見えた日本にやっと足を運ぶ機会を得たのだ。当時、1年間の交換留学が終わった後、ヨーロッパに帰る予定だったが、まさかそのまま日本に残り、将来日本で生活を送ることになるとは予期さえしていなかった。気がつけば、私のほとんどすべての大人としての人生を日本で過ごし、いつの間にか日本で家族を持つようになって、日本は私の「home」になった。

今振り返ってみると、この「最初の1年間」は私の今後の人生の選択に大きな影響を及ぼした。日本学科が専攻だった学部生の時に、女性文化とジェンダーに興味を持ち始めたため、交換留学先として日本の大学で初めてジェンダー研究を目的とする施設を設立したお茶の水女子大学を選んだのだ。正直、お茶大が女子大学であることについてあまり深く考えず、他の大学と何も変わらないだろうと思っていた。しかし、この女性だけの環境でジェンダーが本当にすべての人間の経験を形付けられると初めて感じた。その考えのきっかけとなったのは、私のカルチャーショックだった。

この初年度の中で最も印象が強いカルチャーショックは意外なものだった。来日後の最初の数ヶ月の間たくさんものものにびっくりして、確かにほとんど毎日新しいことを発見していた。しかし、来日前から長年日本について学んでいたからか、普段、外国人が衝撃を受けているもののほとんどにすでに馴染んでおり案外びっくりするものではなかった。だが、私のカルチャーショックの体験は思いがけない方向からやってきて、ジェンダーと日本の女性文化への関心をより強化して、大学院の進学先の選択肢に大きく影響した。

そのカルチャーショックを招いたのは他の学生との会話だった。ある日、留学生と日本人の学部生が入り混じった授業の中で、「将来何になりたいですか？」という問いについてディスカッションをした。「将来何になりたい？」の質問と言えば、どんな国でも子どもの頃から周りで何回も聞かれるだろう。人気の答えがある一方、個人差が出てくる大人になると十人十色の場合が多いだろう。しかし、この授業に参加していた日本人の女子学生の圧倒的な人数は「専業主婦」と答えた。主婦や主夫になりたい人にこれまで1人も会ったことがなかったのも、その答えにピンとこなかった。なぜ日本人の女子学生は主婦を目指すのか？しかも、主婦を目指すのであれば、なぜ彼女らは大学に入学したんだろうと疑問に思った。気になりすぎて、授業後に日本人の友達に聞いてみた。すると、あまりにも冷静で論理的な回答にまたショックを受けた。

日本では、専業主婦になりたくても高等教育が不可欠だ。「大学を卒業すれば」、良い職場

に就職できて、そこで高年収の夫と出会えるから」と説明されたのだ。今振り返ると、日本ではこの論理は当たり前のものだと思っている人は多いんじゃないかと思うが、当時、21歳だったヨーロッパ文化と価値観育ちの私にこの考え方は大きな衝撃を与えた。

まず、20代にもまだなっていない学生が自分の教育の選択肢を将来の結婚のことを予想して選んでいることに驚いた。だが、この考え方に垣間見た教育の重要性の無さよりもさらに衝撃的だったのは、このような女子学生に恋愛への冷静な戦略が広く普及していることだった。結婚や結婚相手のことをこれまで一切気にしていなくて、日本の現状を知らずにナイーブだった私は、まだ出会いもしていない男性との結婚を予期して自分の将来の日常生活と仕事を決意して、そのために紙（紙切れ？）扱いにしかっていない高等教育の卒業証明書を得ることに納得いかなかったのだ。

このように、日本人女性が憧れている将来の仕事の選択肢に大きな文化の違いを感じた。なぜ私と同じ大学で、同じ教育を受けている女子学生は女性として目指しているものがそこまで違うのだろうか？そして、なぜ（旧共産主義の国で育った私に）時代遅れのようにしか聞こえない仕事が日本でそんなに憧れられているのだろうか？なぜ女性の夢はそんなに違うのだろうか？と、あの授業が終わった後、長い間に頭の奥にずっと残っていた。

来日してから10年が経って、日本でパートナーと出会い、結婚して、子どもができて、日本の女性状況とジェンダーについてたくさん学んだが、今でも日本とヨーロッパのジェンダー格差について同じようなことを考えるときがある。結局、今の日本では、「女性が輝く社会」などと女性の社会進出が幅広く叫ばれているが、このような「専業主婦願望」の学生の意識改革を起こさなければ、日本社会は変わらないんじゃないか考える。